

# どーらく 改題 逆説土楽たより

断捨離考

11月号(NO62)通巻 212号

2023年11月10日(金)発行(毎月10日)

【農暦】菊芋は糖尿病にいいと聞く、ス漬けにして食べたい!

○朝(7日)から激しい雨混りの風が吹いていた。今は一転して青空が拡がり陽が注いでいる。生暖かく半袖にした。夏日になりそうな気配である。今日(8日)は立冬である。やはり変だ。しばらく長袖にしていたが、半袖が快適である。まだ出番がありそうである。炬燵を出そうかなと何度か思ったが、この気候だとしばらく先になりそうだ。

○秋の夜長と云うが日は短くなっている。日の落ちるのが早い。夜型の生活をして来ていたが、時間を遊びそうで、就寝時間が早く朝が早くなっている。これでややまとも時間なのかもしれない。この時期、畑に出ても虫に刺されないと思ひ用心を怠ったら小さな蚊に刺された。ネットで調べたらヌカカだと云う。体長1、2ミリほどで網戸もすり抜けるという。小さくて気付かぬうちに衣服の下に潜り込むことから「スケベ虫」「エッチ虫」と呼ばれていると云う。蚊も虫もないのに痒い。正体はこれだった



<柏農業公園で>30日撮影

○蟬も虫の音もほとんど聴けない。独特の音色?で秋を感じさせる興梔も鳴かない。やはり変である。虫やカエルは生態系の基底と聞くが、やはり心配である。消えかけたと思つたセイタカアワダチソウが目立つ。ススキも目立つ。じわじわ変化が起こっている様で怖い。魚も果物も気候の変化の影響が出ている。自然災害も多発している。今日もガザが爆撃されている。小さな変化も大きな変化も起っている。ホモサピエンスが絶滅危惧になる前に、人類の置かれて状況を自覚すべきだと思うのだが。

○黒豆、小豆は少量になりそうだが収穫出来そうである。ブルーベリーなど少しずつ剪定をはじめている。蔓植物などの刈り取りをしているが、トゲのある蔓植物(カナムグラ)は知らぬ間に繁茂している。雑草の如くに云うが困った存在である。薩摩芋の後は耕起し、ほうれん草と花菜を蒔いた。ヤーコン、キュウイ、それに菊芋の収穫をしたいと思っている。菊芋は糖尿病にいいと聞く、ス漬けにして食べたいと思っている。(了)



<薩摩芋>16日撮影

【楽農】<畑>薩摩芋、カボチャ、黒豆、小豆の収穫。菊、シシト

ウなど少々収穫。ブルーベリーなど剪定。蔓植物の刈り取り。ほうれん草、菜花の種蒔  
\*子ども食堂へ薩摩芋、カボチャ、シシトウなど届ける(19日)

【楽市】イベント等; バードゴルフ大会(12・9日) 詩吟例会(12・2・9日) 笠吟連発表会(15日) 川柳の会(2日)

### 【つぶやき=Tweet】報復の果てに平和はない！

○日々爆撃で人が殺されている今、同じ時間を生きていることに恐怖と責任を感じる。加担する側にいると思うと苛立ちを覚える。テレビで新聞で観るたびに、止めろと叫びたくなる。ガザは高い塀に囲まれ、街が社会が監獄状態が数十年続いている。もしも自分がそんな理不尽な中に置かれたらどうするだろうと、戦闘兵士に憧れるだろうと思う。

○ガザへ原爆投下まで云うイスラエルの閣僚がいるという。ナチがユダヤ人を殲滅しようとしたことを、イスラエルがやろうとしている。ガザへの攻撃はそれを思わせる。まさかと思うが悍（おぞ）ましい。

○4日の朝日に“報復の果てに平和はない”の見出し記事があった。「ガザ攻撃は、報復する側の圧倒的な軍事力と巻き添えになる民間人多さなど、米国のアフガニスタン戦争とよく似ている。」という。今のアフガニスタンの現状を見れば、報復からは悲惨しか生まれない。

○「欧州が説いてきた理念が「二重基準」に揺れている。EUのフォンデアライエン欧州委員長はハマスの攻撃から6日後イスラエルを訪問。無条件支持を強烈に世界に印象付けた。ガザへの空爆による市民の大きな被害に触れることはなかった。」と7日朝日“信頼を損なう欧州の二面性”の見出しで書かれていた。アラブへの人道は無視・軽視の先進国、特に欧州は「二重基準」(ダブルスタンダード)で自国の都合のよいように理屈付けする。

○米国に兵器購入を約束し43兆円の軍備予算を掲げ欧米に肩入れする。一方で“法の支配”現状変更を許さない“を口にする首相のことばが空しく聞える。欧州の「二重基準」と全く同じである。そこで、こんな川柳を詠んでいた。**ユダヤ人と自分の悲劇をガザです。直線の国境こそがアラブ獄。壁の中一度は外へそれ地獄。**ガザ攻撃は止めねばと思う。

○“民族間の紛争といった、部分システム間の摩擦を解決する大原理というものを人類はまだ発見していない。地球の一体化が濁流のように進む一方、諸民族としては国家としての自立を求めて分岐してゆく。だが相互の衝突を回避できる普遍的原理は未だ見いだせていないと、文化人類学者(梅棹忠夫)は1979年の講演で述べた。とにかくひたすら話し合いを重ね、火種をもみ消すほかないと。以後、世界にどれだけお血が流されたか。『二十一世紀の人類像』から(31日の折々のことば)“引用が長くなってしまった。この頃、雑誌プレジデントに掲載された梅棹忠夫のものを読んでいた。仏教関係が多く仏教哲学者だと思っていた。関心があり好んで読んでいた。梅棹忠夫が言われた通りだと思う。引用が多過ぎた。(了)

○断捨離考：言葉がない。年末には？

【後記】止めなければ人類が問われる。【HP転載】



＜我が家の干柿＞16日撮影



＜黒豆の乾燥＞5日撮影

発行者；小暮虎雄

住所；笠間市本戸4201-10

携帯電話；090-9333-4135

HP；kogure農場

メール；[torao-k@nifty.com](mailto:torao-k@nifty.com)